

先進校に学ぶキャリア教育の実践

チームワークで臨んできた 多様性を強みにして個性を伸ばす学校づくり

— 咲くやこの花高校(大阪・市立) —

再編統合により8年前に開校した咲くやこの花高校は、様々な専門分野が学べる併設型中高一貫教育校です。

就職から大学進学まで幅広くサポートできるよう、進路指導・キャリア教育の体制を構築。

近年では、東京大学や京都大学などの難関大学進学者も輩出するようになりました。

もともとは「進学校」ではなかった同校が、なぜこのような実績をあげるようになったのか。これまでの取り組みをご紹介します。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍再編統合 🔍中高一貫教育校 🔍多様性 🔍進学指導 🔍産業社会と人間 🔍アクティブラーニング

学力以外にも様々な 個性を認め合う校風

大阪市立咲くやこの花高校の特徴を一言で表すなら、「多様性」だろう。教頭の板垣秀和先生は、「生徒それぞれの個性を生かして活躍する場がたくさんある学校」と表現する。

同校は、大阪市の初めて設置した併設型中高一貫教育校だ。設立の狙いは、早くから興味・関心の現れやすい、芸術・スポーツ・言語・ものづくりの各分野の才能を効果的に伸ばすこと。文科系科目に重点を置く扇町高校と、元工業高校で調理師養成施設指定校でもあった此花総合高校、2校の再編統合により、2008年に開校した。

学科は3つ。身体と言葉を用いた豊かなコミュニケーション能力の育成を目指す演劇科。在学中に調理師免許が取得できる食物文化科。そして、理数、ロボット工学、スポーツ、言語文化、造形芸術、映像表現の6系列を擁する総合学科。学べる分野は実に幅広い。

校内には様々な生徒の活動が見られる。食物文化科の3年生が調理実習で作ったランチを教職員や生徒に提供したり、演劇科の生徒が伝統芸能発表会で狂言を披露したり、映像表現系列の生徒がCGや映画などの作品を展示したり…。また、生徒の進路希望は、技術を生かした有名ホテル等への就職、憧れの職業を目指した専門学校への進学、そし

て難関大学への進学など多彩だ。校長の森知史先生はこう胸を張る。

「3つの学科の生徒それぞれの輝く場がある学校です。東大に行く生徒だけでなく、みんなの尊敬を一身に集めるのではなく、それぞれがお互いの個性を認め、尊敬し合って切磋琢磨しています」

生徒の期待に応えるため 急務だった進学校体制整備

開校以来の最大のテーマは、学力面の「多様性」だ。各分野の専門性を重視した中学選抜により入学した生徒たちは特に、基礎的な学習レベルの生徒から、国立大学二次対策を求める生徒まで、学力差が大きい。主要3教科は習熟度別授業で対応しているが、それ以外の教科はクラス斉で行わざるを得ない。

前身の2校は、いずれも進学に重点をおく学校ではなかった。しかし、併設中学校1期生には、大学進学を視野に入れる生徒が多く、学力の高い生徒も入学した。総合学科長の栗本要人先生は、「新たな層の生徒にも対応する環境が高校側にできないと、せっかく併設中学で育ててきた力のある生徒を、他の高校に逃してしまうのではないかと危機感をもったという。実際、保護者からは不安の声があがっていた。6年間一貫教育でしっかり育てたい。そのためには、1期生の期待に応えられるよう、前身校では手薄だった進学指導の体制づくりが急務だった。



School Data

総合学科(理数・ロボット工学・スポーツ・言語文化・造形芸術・映像表現系列)・演劇科・食物文化科
 /2008年設立/生徒数682人(男子199人・女子483人)
 進路状況(2016年3月末実績) 大学146人・短大12人
 専門学校39人・就職13人・その他10人
 大阪市此花区西九条6-1-44
 TEL 06-6464-8881
 URL <http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=h543541>

Outline

扇町高校と此花総合高校の再編統合により、多様な分野の才能を伸ばすことを目指して2008年に誕生した、大阪市立で初の併設型中高一貫教育校。前身校の流れをくむ総合学科と専門学科を設置し、多様な分野の実践的な教育を展開する。2013年度から3年連続で大阪市教育委員会「がんばる先生支援事業」の研究指定を取得し、進学指導やキャリア教育の体制整備、アクティブラーニングの導入に取り組んできた。

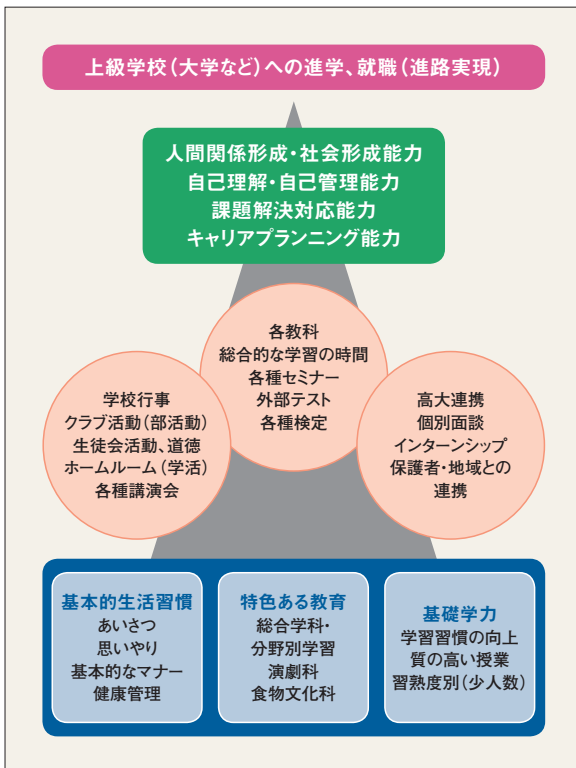
指導の標準化を図り 多様な生徒に対応

しかし、教員のほとんどは前身校からの異動者だ。生徒指導に長けた教員は少ないが、進学指導の経験が豊富な教員は少なかった。教員間の進学指導の考え方や知識量の差が大きくては、生徒に対して



各学科、系列の授業風景。上段は左から演劇科、食物文化科、総合学科の理数系列、ロボット工学系列、下段は左から総合学科のスポーツ系列、言語文化系列、造形芸術系列、映像表現系列。座学だけでなく実験、実習、制作活動などが充実している。

図1 咲くやこの花中学校・高校の
キャリア教育のイメージ



統一した対応は難しい。
そこで、進学指導の先進校の視察や予備校主催の研修会参加などで、全教員で共有できるような進学指導方法を研究。生徒が安易に指定校推薦に流されることへの弊害を教員間で共有し、一般入試で勝負できるような体制と目線合わせを推進した。
進学指導の柱に据えたのは、「進路ガイダンス・進路講話・進路面談」「各種セミナー(進学対策講習)」「外部テスト」の3つだ。進路ガイダンス等で進路環境の理解や進路意識の向上を図り、高い目標に向けた努力を促進。学力の幅広い生徒を対象にした授業を補完するため、放課後や土曜日、長期休業中に「セミナー」として講習を実施。そして、外部テストを計画的に行い、その結果の分析会議

も始めた。
また、こうした同校の指導方法をまとめた「進学指導マニュアル」を作成し、全教員に配布した。マニュアルには進学指導の方針から、各学年の指導の流れ、模試や進路希望調査と面談などとの関連がわかるチャート図、様々な入試制度などの情報を分かりやすく集約。同校が3年間の進路指導を実践していくうえで、重要な指針となっている。そして、常に実態に合わせて改編を行っている。
このような進学指導体制は、普通科進学校にとっては特別に目新しい内容ではないだろう。統一的な指導体制は既にあるため、次の段階として生徒それぞれの興味・関心を刺激する体験的な活動も充実させようとする普通科が多いのではないだろうか。しかし、同校に必要な



大学の学びに関するポスターセッションの準備



「産社」で卒業生パネルディスカッションを開催

図2 2016年度「産業社会と人間」実施予定

月	テーマ	主な内容
4月	オリエンテーション	○学科長講話：「産業社会と人間とは」「総合学科とは」など
	自己理解・他者理解	○ライフプランI-今までの振り返り- マインドマップ、自己申告書記入、個人発表
	情報収集・職業理解	○新聞を利用したキャリアに関するグループワーク
5月	進路学習	○学科長などレクチャー：グループ探究学習など ○講演会①卒業生によるパネルディスカッション
	系列理解	○系列別体験、科目説明
	進路学習	○大学の学びに関するグループ探究学習(以後継続) ○講演会②教育実習生によるローテーショントーク
6月	プレゼンテーション	○講演会③「プレゼンテーションについて」
	履修登録	○履修登録全体説明会
	進路学習	○講演会④「大学進学について」
	プレゼンテーション	○ポスターセッション発表練習と、発表①
	リフレクション・履修登録	○ポスターセッションの反省と、発表②に向けて ○履修個別相談
	プレゼンテーション	○ポスターセッション発表②
7月	自己表現	○講演会⑤「小論文の書き方講座」
夏休業	課題：オープンキャンパス見学シート記入、ライフプラン仮原稿作成	
8月	職業理解・将来設計	○講演会⑥「未来をみつけよう」 ○ライフプランII制作(以後継続)
	将来設計・自己表現	○新聞を利用したキャリアに関するグループワーク ○ディベート大会または自由創作文ワークショップ講座(未定)
9月	プレゼンテーション	○ライフプランIIクラス発表会
	職業理解・人権教育	○講演会⑦「心のバリアフリー」
	プレゼンテーション・まとめ	○ライフプラン全体発表、「産社」まとめ

施策は、こうした普通科の流れとは逆だったようだ。

「本校のカリキュラムには、各学科ごとに既に多彩な体験的活動が含まれていました。しかし、どんな学科や進路にも共通する土台となる、基本的な生活習慣や基礎学力といった『普通的』な要素が弱かった。だから、本校には土台をしっかり作る必要性があり、それにより、生徒は各自の個性を一層伸ばせるのではと考えたのです」(栗本先生)

卒業後も持ち続ける高い目標への挑戦心

中学校1期生が6年間の一貫教育を終えて迎えた13年度の受験では、安易な指定校推薦の選択を減らすことに成功。多くの生徒が高い目標をもって挑戦した。その結果、国公立大学合格者数は前年比約10倍に増加(図3)。そして、京都大学や大阪大学への合格者も出た。就職においても、高卒では難しい企業への入社

生徒の期待に応えるために進学体制の整備が急務だった同校だが、決して進学実績だけを追っている学校ではない。学校の活動すべてをキャリア教育と位置づけ、学校行事や生徒会活動などで生徒が主体的に行う場面を随所に設定。1、2学年はそれぞれ年4〜5回、大学や研究機関から講師を招いて「キャリアガイダンス」(進路講演会等)を実施し、長期的な目標設定を促したり、社会が求める人材要件を伝えたりしている。

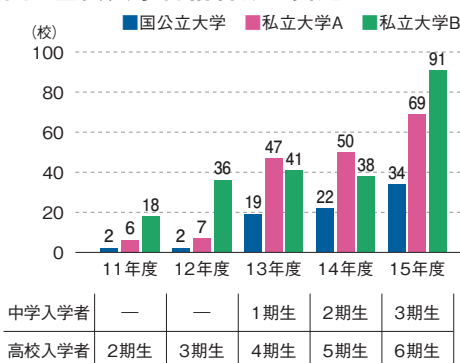
など好調だった。こうした進路実績により、併設中学生の保護者からの不安の声はびたりとやんだという。

卒業後の姿に目を向けると、その歩み方は様々だ。フリーペーパーサークルで編集長を務める早稲田大学進学者、プロレスラーと学生という二足の草鞋を履く日本体育大学進学者、大手劇団でメインキャストを務める演劇科卒業生…。こうした挑戦的な活動は、土台の部分と個性を發揮する部分の両方の教育で育まれたものと思われる。さらに、進路指導主事の田中愛子先生はこう考える。

「本校の良さである、『無理だと思いきまずにやってみよう』『まず挑戦しよう』という精神を、卒業後ももしっかりもち続けてくれているようです。前向きに頑張っているなとうれしく思います」

講演会や「産社」を軸に学校生活全体でキャリア教育

図3 主要大学合格者数の変遷



※私立大学A：早稲田、慶應、上智、東京理科、明治、青山学院、立教、中央、法政、関西、関西学院、同志社、立命館大学 ※私立大学B：京都産業、近畿、甲南、龍谷、日本、東洋、駒沢、専修大学

また、1学年後半から系列に分かれる総合学科では、「産業社会と人間」(以後「産社」)がキャリア教育の柱だ(図2)。1学年前期の集中授業として週4時間実施し(2単位)、各自の系列の決定を促している。

当初、「産社」は履修登録のためのプログラムだった。しかし、社会で求められる力をふまえて、将来やりたいことやそれに向けて今できることを考えさせるプログラムにしよう、毎年少しずつ改善を図ってきた。今年度は、外部講師による7回の講演会や、これまでの自分と今後を考える「ライフプラン」の制作と発表、進路に関連したグループワークなどが計画されている。

「キャリア教育に熱心に取り組むことと進学実績は、相反するという見方をされることもあります。しかし、これらをリンクさせることで、必ず相乗効果が得られるはず。そう信じて、両面の充実を図っています」(栗本先生)



進路指導主事
田中愛子先生



首席・総合学科長
栗本要人先生



教頭
板垣秀和先生



校長
森 知史先生

Interview

仲間の個性を尊重し合い、 夢を応援し合える学校

●金本大樹さん(2学年・造形芸術系列)

「絵や立体の制作をしたくてこの学校を選びました。芸術の授業では、技術や理論だけでなく、ものの見方や作品を作る心構えなど内面的なことも教えていただけます。この学校の魅力は、そんな楽しい授業と、生徒主体の学校行事だと思います。進路については、恐竜などの古生物が学べる大学に進学希望です。『産社』でこれまでの自分を振り返ったことや、映画の影響で、系列とは別の新たな興味の対象をもつようになりました」



写真左から村上さん、林さん、金本さん、新谷さん(全員、総合学科)

●新谷美香さん(2学年・映像表現系列)

「オープンスクールで見た映像表現の作品から興味をもつようになり、この系列に進みました。今は基礎的なことを学んでいますが、3年生では動画を制作できるのを楽しみにしています。大学進学はせず、将来は声優になるのが目標です。1学年の「産社」で将来の夢を発表する時、最初は「声優になりたい」なんて恥ずかしくてとても言えない、と思っていました。でも、勇気を出して話したら、誰も笑わずに聞いてくれてうれしかったです」

●村上貴士さん(3学年・理数系列)

「将来は、大学の理学部に進学して、地元の道頓堀川の水質をきれいにする方法を科学的に研究したいと考えています。そのためには様々なことを徹底的に知ってやろうと、最近はずっかり『読書の虫』です。この学校の特徴は、いろんな人がいることだと思います。ここでさらにいろんな人の影響を受けて個性を伸ばしています。あとは、先生方の熱意がすごい。みんなで良くしようという家族感を感じます」

●林 美羽さん(3学年・言語文化系列／生徒会長)

「私の将来の目標はウエディングプランナーになることです。どんな職業に就くとしても、プレゼンテーションなどの話す力は必ず役立つと思うので、それが鍛えられる大学への進学を考えています。この学校の生徒は個性的な子ばかりで、それが面白いです。進路希望もいろいろですが、友達との進路を笑ったり『無理やろ』と言う人はいなく、『頑張れ』『諦めるなよ』と応援し合える雰囲気のある学校だと思います」

授業改革をテコに図る 中間層の底上げ

昨年度からの重点テーマは、ポリユームゾーンである中間層の底上げだ。それまでは、高い進路目標を持つ層を対象にした体制づくりと、基礎学力を充実させた層への対応に追われていた。しかし、「本来、最もエネルギーを注がなくてはいけないのはポリユームゾーンの生徒たち」と森

校長。底上げには生徒全員が授業に集中して取り組むことが何より大事との考えから、アクティブラーニングなどの新しい手法を取り入れた授業改善に乗り出した。昨年度はまず「教科でモデルを示そう」と、英語科でアクティブラーニングを導入。「英語を使うことを楽しむ」を目標に、英語科全教員で研究を進めた。その手応えから、今年度は全教科に授業改

革を広げる。

「アクティブラーニングを導入した授業では、生徒も教員も笑顔が多くなりましたね。教員が随所に入れるレクチャー時は、一方的な講義型授業の時より、生徒が集中して話を聞いています。その結果テストの平均点も上がりました。『何を教えるか』ではなく、『どんな力をつけさせるか』という視点を、今後は学校全体で強化していく計画です(栗本先生)」

底上げに取り組み始めて1年。今春、同校中間層の多くが目指す中堅大学の合格者は、前年より2倍以上に増加した(図3)。また、話題を集めた京都大学の「特色入試」ではなんと合格者も。これはもちろん本人の能力と努力によるものだが、小論文の添削などで多くの教員がサポートしたことも小さくないだろう。

ばらばらだからこそ 「団体戦」で成果をあげる

進学位制の整備、キャリア教育の充実、そして授業改革に次々取り組んできた同校。その学校づくりのキーワードは「団体戦」だ。興味の方向や考え方がばらばらだからこそ、1つに結束しようという気持ちで大切にしていく。HR活動、学校行事、大学受験など様々な活動において、同校教員は「二言目には「団体戦」という言葉を使う。「二人でやってへんで、みんな一緒にやっつてんねん」と。

「個性がぶつかり合って個人プレーに陥

りがちなところを、チーム意識に働きかければ、個性を生かした強い組織にもなる。弱みを強みに変えようと努めてきました(栗本先生)

教員の取り組みもまた「団体戦」だ。最も生徒に近い存在であるクラス担任を「主役」に位置づけ、クラス担任を立てる。周囲の教員は「裏方」として担任をサポート。1人の生徒に、担任だけでなく、教科担当や進路指導担当など多くの教員が関わる。各教員の熱意と風通しの良い教員組織が、自然とこうした動きを生んだ。

「生徒を最大限に伸ばすには、教員がスクラムを組んで力を合わせるしかない。そんな教員の献身的な姿を見て、生徒は自分も頑張ろうと思ひ、信頼感をもつ。それが最後のひとふんばりにつながることもあるのではないだろうか。このチームワークの良さが、本校の学校づくりの最大のポイントかもしれません(森校長)」

開校から8年。草創期が終わりつつあり、これから教員の世代交代の時期を迎える。目下の課題は、暗中模索を支えてきたスピリッツやノウハウを、どう次に引き継いでいくかだ。「挑戦してうまくいった、生徒を成長させた、という手応えや成功感は教員が頑張るエネルギーのもとです。これらを今後も大切にしていきたい」と森校長。難しい学校づくりにチームワークで臨んできた同校は、新たな局面も「団体戦」で乗り切っていくそらだ。